

朝鮮

吾、朝鮮国の為に闘えり

香川県 大平 繁 信

私の生まれた所は、弘法大師様の四国八十八カ所巡拝の第八十七番札所の長尾寺の隣です。また八十八番結願寺の大窪寺もすぐ近くにありまして、弘法大師様の御心で近隣の人は至福の精神に満たされた穏やかな土地柄です。

地形も瀬戸内海に面し、波は静かで時化もなく、台風シーズンなどの南からの強風はすべて、四国中央部を東西に走る山脈がまるで屏風のごとき役目を果たしてくれます。日本でも最良の土地

に生まれ育つたと喜んでいきます。お国自慢になります。お国に感謝していただきます。

私は、両親の下に、子供四人の六人家族でした。私は三男で、兄二人姉二人の末っ子で、全員に可愛がられながら育ちました。家は農業で、水田一町歩を有し、地元では大百姓の類でした。農耕用に和牛を一頭飼育していました。この牛の世話は大変でした。飼料から糞尿の処理まで兄や母は一生懸命に父の手助けをしました。

近くに叔母がいました。店は「貝のボタン」を作っていました。子供が無く私が養子のような状態で身柄を引き取られまして、小学校高等科を終わってから、家業に励みました。青年学校に通学

(軍隊入隊時の予備教育だった)、勿論青年会にも入会し、近隣の若衆と仲良く青春の日々を送りました。

昭和十七(一九四二)年七月十五日、津田町小學校において徴兵検査が実施され、近隣の町村より大勢の若者が来ました。世はまさに軍国時代の華やかな時です。二、三歳年下の者も「特別志願だ」と言って来ていました。役場の兵事係が一生懸命皆の世話をしていました。私は甲種合格になりました。「叔母さん、甲種だ」と報告しましたら、叔母はションボリして「致し方がないな」と一言呟いていました。あの時の印象が六十余年過ぎた今も心に写し出されます。

その年即ち昭和十七年十二月十日に朝鮮会寧の第七十三部隊へ入隊せよとの命令書を役場の兵事係が届けてくれ、「確かに渡しましたよ」と駄目を押しして「御目出度う御座います」で帰って行き

ました。集合場所は福岡県博多の櫛田神社でした。近隣の人たちはじめ友達、親戚等に見送られ出征しました。神社の広場には三十人程の青年が日本全国から来ていました。曹長さんの指示で福岡の部隊の兵隊さんが、それぞれ軍服や靴の号数を合わせて、我々に支給してくれました。こうして外見だけは陸軍二等兵が出来上がりました。

臨時編成で三個分隊を作り、代表者を決めて、各々指揮官の指示で乗船しました。申し遅れましたが香川県からは自分一人でした。そして関釜輪送船にて釜山港に上陸しました。さらに貨物列車に乗車して北進し、ようやく会寧へ到着しました。駅前から兵営まで徒步行進して、ようやく歩兵第七十三連隊に到着しました。

正確には高射砲隊で、そこには野砲兵や各兵科の部隊がありました。北朝鮮の十二月は氷点下十余度が連続し、時には二十余度にもなりました。でも「三寒四温」の言葉のごとく確実に三寒四温でした。

初年兵教育はご多聞にもれず厳しいものでした。起床喇叭から夜の消灯喇叭まで、初年兵は腰掛けに座って煙草を吸う時間も無しでした。自分は青年学校当時に教官に指示されて「軍人勸諭」や「戦陣訓」などは充分に勉強していましたが、大変助かりました。でもこのほか兵科の操典や作戦要務令など種々の勉強がありました。

自分は下士官候補生として志願しました。そのため消灯後も戦友は安らかに寝床に入っている時に、中隊事務室の常夜灯の光で目玉をこすりながら「典範令」などの猛勉強をしました。その甲斐あって下士候に合格しました。本土の下士官学校に帰れると思ったのですが、毎日弁当持参で各部隊（全兵科）の下士候者が集まっての集合教育でした。

昭和十八年十二月に一選抜で上等兵になり「兵の範と成れ」と中隊長に檄を飛ばされました。この一年間が精神的・肉体的にも最高に苦勞しました。

翌昭和十九年新春、釜山要塞司令部への転属命令が発令され、辞令を手に釜山へ赴任しました。釜山要塞司令部高射砲隊・内山大隊は観測係として服務しました。着任早々に米軍機B29の洗礼を受けました。敵機は高々度で飛来しますから、友軍機の反撃を軽く嘲笑うかのごとく飛び去って行きました。双眼鏡で見ながら口惜しくて地団駄を踏みました。高射砲も七、八千メートル位までが着弾高度ですので、これ以上の高度では一切届かず、敵の自由行動空域でした。

なお、日本軍は弾薬が欠乏しており、敵の大攻撃に対して一か八か？の時でないとは射撃命令はありません。即ち発砲すると自軍の位置を敵に知らせることになり、次回の攻撃目標になるなどの理由でした。敵の戦法は高々度より偵察を充分行い、検討を行った上に攻撃して来ていると思いましたが。また高速で超低空飛行で頭上に飛来し、小型爆弾を落とし、機関砲や機銃を乱射して去って行くのです。この有様を見ながら、地上から対空

射撃ができぬ「歯痒さ」、何のための防空隊だと本当に残念でした。

結局、昭和二十年八月十五日の終戦まで釜山要塞の防衛に任じましたが、敵の落下傘部隊の降下とか、船舶による上陸を警戒しただけでした。二度程直接基地が空襲され、将校が一人機銃弾で倒れ戦死されました。他に数人の傷夷者が出ました。そして終戦まで大空に向かってはただの一発も砲弾は発射せずでした。土囊の中に偽装網を掛けて遮蔽したままの高射砲と高射機関銃でした。ひたすら警戒のみでした。

上層指揮官は肉体的にも精神的にも一切苦痛を感じずに日時を経過したことに何を考えていたのか、自分達は理解に苦しみました。「朝鮮の為だ、頑張つてやれ」と叱咤激励していた幹部は早々に日本に引き返したとのことでした。

昭和二十年八月十五日、終戦だと部隊解散となりました。幹部将校は一人も姿を現さず、下士官

は全員治安維持のために警察官として服務せよと命ぜられました。巡查として警備に着いたのです。が武器なしの丸腰です。思えば不可解なこと。朝鮮人に武装解除させられたのだが、その朝鮮人の「暴動を鎮圧せよ」とのことでした。武装集団に丸腰の自分達が対抗することは不可能だ。ただ誠意をもって事に臨んだ所為で無事鎮め得たと思えます。

日本軍人に対しての反感は厳しく、私達は巨済島の警察署の留置場に入れられました。この時は、「お大師様 南無大師遍照金剛」とお祈りを捧げました。世に言う臭い飯を食わされたのです。自分達は朝鮮のために働いたのだ。何故このような処置を受けるのか、と不可解至極でした。一カ月程経過した頃に米軍が仁川に上陸進駐して来たとのこと、即座に出所させてくれました。我々下士官集団のみ小さな船に乗って下関へ還つて来ました。援護局の人がいて、それぞれ手続き後、汽車賃（切符）を受け取って故郷へ帰り

ました。山陽線沿線も空襲による焼夷弾で丸焼けでした。岡山から宇高連絡船に乗り高松から懐かしい故郷へ一目散で帰りました。名勝、白砂青松の津田の松原は健在でした。八十七番札所「長尾寺」、八十八番の結願寺の「大窪寺」も昔の姿のままでした。勿論我が家も皆達者でした。

復員後は消防団にて活躍し、また農業委員などとして軍人精神と鍛錬した肉体で公共のために活動しました。そうした事などが認められたのでしょうか、「勲六等 単光旭日章」を受賞しました。